寫眞渡來のころ

The Advent of Photography in Japan

横山松三郎 軽気球の飛揚実験 「相父松三郎遺影」アルバムより 明治11年（1878年） 6月10日 （個人蔵）

1997年1月9日㊍—2月28日㊎

会場＝東京都写真美術館・2階企画展示室
主催＝東京都写真美術館 北海道立函館美術館 日本経済新聞社
協力＝東武鉄道
観覧料＝一般・大学生600円（480円） 小・中・高校生300円（240円）
常設展との共通観覧料＝一般・大学生1,000円（800円） 小・中・高校生500円（400円）
いずれも（ ）内は、20名以上の団体料金
＊小学生未満、65歳以上の方、および障害のある方とその介護者1名は無料になります（証明できるものをご持参ください）
開館時間＝10:00～18:00（木・金は20:00まで） 入館は閉館の30分前まで
休館日＝毎週月曜日（月曜日が祝日または振替休日の場合はその翌日）

写真鏡 （個人蔵）

Tokyo Metropolitan Museum of Photography
東京都写真美術館
〒153 東京都目黒区三田1-13-3 Tel.03-3280-0031
1-13-3 Mita, Meguro-ku, Tokyo 153

写真術が発明される前、眼の前の事象を正確に描くためにカメラ・オブスキュラ（暗箱）で得られる像をなぞっていました。

「写真術」は19世紀中頃にパリで公表されたものですが、これはカメラ・オブスキュラで得られる像を化学的に定着したものであり、従って、写真は一点透視画法で描かれた絵画と原理的には同じものといえます。

本展ではカメラ・オブスキュラをカメラの原形と位置づけ、長崎の出島を通して伝来してきた17世紀中頃から、「写真術」そのものが渡来する幕末、そして急速に広まっていく明治10年頃までの、写真術が渡来した前後の状況を3部構成で展示するものです。

「写真」という言葉は写真術が渡来する以前から「真を写す」という意味で使われており、同じ類の言葉も多く、写真という言葉の意味を通して、人々の意識の変化を探ります。

【第1部】 カメラ・オブスキュラの伝来から写真術が渡来するまで

透視画法等の西洋画法が、国内においてどのように研究され、広まっていったのか。また、光学的な道具（写真鏡、顕微鏡、望遠鏡）についても考えてみます。

出品作品：川原慶賀「蘭人商館長之図」、西村重長「中村座假名手本忠臣蔵」、写真鏡、顕微鏡、望遠鏡、他

【第2部】 「写真術」そのものが渡来した幕末

渡来期において、誰がどの様な形で写真術に取り組み研究したか。また、その成果はどの様なものであったのかを検証します。

出品作品：上野彦馬「田崎道孝像」、ベアト「長崎のパノラマ」、大野弁吉「一東視窮録」、堆朱カメラ、他

【第3部】 幕末から明治10年頃まで

写真術に魅了された人たちは、写真をどのように捉え、そこからどのように展開していったかを、ここでは三人の写真師、下岡蓮杖、島霞谷、横山松三郎の仕事を通して検証します。

出品作品：下岡蓮杖「函館戦争之図」、島霞谷「美人図」、横山松三郎「軽気球の飛揚実験」、他

講演会のお知らせ
1997年2月1日（土） 15：00～17：00
「写真という言葉をめぐって」
青木 茂（跡見学園女子大学教授・町田市立国際版画美術館館長）

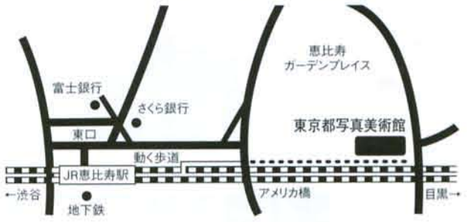
＊毎月第2、4金曜日の午後2時より
当館学芸員によるフロア・レクチャーが行われます

（作品保護のため、会期中に展示替えをします）

●本展覧会は北海道立函館美術館へ巡回します。
会期＝1997年4月5日～5月12日

表：『朝野新聞』明治11年6月11日
6月10日の軽気球の飛揚実験を伝える記事

反射式覗き眼鏡（オランダ製）
18世紀中頃
（神戸市立博物館蔵）



交通機関＝JR恵比寿駅東口より徒歩7分 （恵比寿ガーデンプレイス内）
お車でのご来館はご遠慮ください。

浮絵 座敷人形遣図 18世紀中頃（神戸市立博物館蔵）

島霞谷 徳川茂栄とハラタマ 開成所にて
慶応3年（個人蔵）

喜多川歌麿画 蘭人相学拾射
覗き眼鏡を見る美人（神戸市立博物館蔵）

上野彦馬 松平忠礼と三人の男 1872～73年頃

島霞谷 美人図 油彩「大日本霞谷写真」の署名
（東京国立博物館寄託）

エリファレット・ブラウン・ジュニア 田中光儀像
1854年（東京都写真美術館寄託）